

子どもが不登校、そのとき親は!!

子どもが不登校になったとき親はその不登校のことをどう考えていけばよいのだろうか
か不登校新聞(2023年12月15日号)を読んで2つの記事から紹介してみたいと
思います。

ひとつ目は「お母さんのほけんしつ」を開設している土橋優平さんの記事からの抜粋
です「親御さんにかぎらず、先生も私たち支援者も『この子が不登校だから』という
ういつの間か子どもたちを色眼鏡で見えてしまうことがあります。不登校・発達障害・HSC
など、そうした世間的なネガティブな印象の強い言葉に引っ張られて、必要以上に心配
してしまうのです。色眼鏡というのは、人が持つ固定観念であり、差入親でもあります。
……しかし、不登校という色眼鏡をかけて子どもを見た瞬間から彼らの個性や
思いは見えなくなってしまいます。子どもたちは本当にカラフルなのに色眼鏡をつける
かゆえに、『不登校になってしまうかも』という心配の色でしか見えなくなってしまうの
です。ではどうすればよいのでしょうか。それは『子どもの声を聞くということ』
今、子どもは、何を感しているのか、何を考えているのか、何が楽しいのか、何が悲しい
のか。どうしたいのかなど、子ども本人の声を聞くことが大切なのです。……

例えば、学校へ行かずにリビングでゴロゴロ、スマホを見ている姿を見て『もうい
いかげんにしなさい』と。でも、その子が見ていたのは、不登校経験のある芸能人の当
事者のメッセージでした。色眼鏡をつけずに「今あなたは何をしているの?」と聞けば
反応も違っていたのかも……『こうだろう』『こうなるかもしれない』と決めつけずに
正面から“子どもたちの声を聞くこと”、そこに評価を加えず、ただ聞くに徹すること、色眼鏡
を外し、話を聞いてもらえることが子どもたちの生きていく支えになるのです」……

土橋さんの文章を読みながら、自分(親)の考えは置いて、なによりも大切なのは
「子どもの声を聞く」ことの大切さを改めて思っています。子どもが学校へ行かない
と言いだしたとき、どの親も「どうしたら」「大変だ」と訳も分からず、あわててしま
います。そして「なぜどうして」と考えます。子どもも訳も分からず、説明できるはずな
く、聞かれば聞かれるほど、自分がいけないのだと、聞かざることにになります。そし
て親はいろいろな眼鏡をかけてみなくてはなりません。眼鏡があわれないと思えば次
の眼鏡にかけ変えて、そのうちに子どもの心が見えなくなっていくのです。

だから世間の色眼鏡は、はずして「子どもの声を聞くこと」その小さな子どもの心の声
を聞きのがさないように、聞くことに徹した親の姿に気づいたとき、子どもは自分から
自分の言葉で話してくれるようになると思うのです。

子どもの声を聞くことを大切にしている親の思いは言葉ではなくその気持ちがあれば
子どもはきっと気づき、感じて、安心できるのだとも思うのです。そんなことを考えました。

二つ目は、かつて不登校を経験したことのある母親が息子が小1〜小3で不登校になった経験を語っている手記が載っていたので紹介します。

「私は4人の子供を持つ母親です。長男が『もう小学校なんかやめる』と言いつつのが、小学校へ入学したばかりのときでした。給食をムリやり食べさせる。授業中に児童を大声で叱るなど、小学校入学を心持ちにしていた長男にとって、小学校という場所は毎日通いたく思える所ではなかったようです。『学校へ行きたくない』という息子の姿が子供の頃の自分と重なりました。私に学校、地域、親戚、家族から『おかしな子・問題児』というレッテルを貼られて生きるしかありませんでした。周囲の大人たちからのさまざまな言葉の暴力や毎日、叩かれ、ムリやり学校へ連れていかれる経験は、これでもかというほど私の自己肯定感を引き下げました」と・・・そして私は息子の『学校へ行きたくない』という言葉を知った時に『困ったな』という親としての心配と同時に『息子はまちがっていない』という揺ぎのない思いが心から湧き上がってくるのを感じました。たとえどんな理由であれ、たとえ理由が言語化できなくても、子どもが学校へ行きたくないと言ったら、それが真実です。私自身の経験を活かさなければ何のために親として存在しているのかと自問しました。・・・私は母親として私の不登校のときに言ってほしかったことを息子に伝えようと思いました。『お父さんも、お母さんも、誰よりもあなたの味方だよ。学校へ行きたくないという、正直な気持ちも伝えてくれてありがとう』と伝えました。そのときの息子の心からの安心した表情は今でも忘れません。私は学校に通えることが、すべての解決だとは思っていません。どんな状況であれ、子どもは学校を休む権利があるのです。長男の一件があったからわが家では学校は『自由登校』という位置けにしました。』と・・・と書いています。

土橋さんは不登校の子どもに投げかけられる言葉を色眼鏡をかけて見ると表現していますが、二つ目の母親は自分が体験して聞いた言葉を思い出し、レッテルと表現しています。子どもにとって、親から先生から、大人から投げかけられる言葉は、自分の心の中にある思いとは別の色眼鏡であり、レッテルの言葉として聞いています。そして母親はその投げかけられた言葉は私の自己肯定感を引き下げるだけの言葉であったと表現しています。だから自分は「お父さんも、お母さんも、誰よりもあなたの味方だよ」「学校へ行きたくないと言ってくれてありがとう」と伝えたとありますが、その気持ちはちゃんと子どもに伝わるのです。学校は「自由登校」にしたとありますが、素敵な言葉だなく思いました。1年生でもその気持ちはちゃんと伝わるのです。それは、また、行くか行かないか自分で決めていいよ、自分で決めるんだというメッセージでもあります。不登校の子どもにとって一番心が安すまり安心できるのは、そういう親の気持ちを察せられた時です。そして前を向けるのです。それはすべての不登校の子ども同じです。